

本の紹介

『時代に抗する―ある「活動家」の戦後期』

(杉本昭典著、市田良彦・黒川伊織編集)

『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』

(杉本昭典著、前田裕昭監修、江藤正修・広畑貞昭聞き手・記録)

谷合佳代子

(公益財団法人大阪社会運動協会エル・ライブラリー
〈大阪産業労働資料館〉館長)

◆尼崎で活動した杉本昭典

今回紹介する図書二冊は、主に尼崎市に活動拠点を置いていた社会運動家、杉本昭典のオーラルヒストリーである。杉本は京都部落問題研究資料センターの前身である京都部落史研究所所長であった故・師岡佑行とも同じ尼崎で活動していた縁がある。

一冊目に紹介する『時代に抗する』は二〇一四年に私家版として発行された。同書は国立国会図書館を始め、全国の公共図書館で一冊も所蔵されていない希少本である。二〇二〇年四月現在、国内の図書館で所蔵が確認できるのは当エル・ライブラリーと同志社大学だけである。したがって、紹介してもほとんどの読者が同書を読めないというおそれがある。

また、同書の記述は主に日本共産党五〇年分裂時代を中心とし、

その後についてはほぼ言及がない。そこでもう一冊、同書刊行の翌年に発行された『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』と合わせて取り上げることとした。

まずは杉本昭典の略歴を『時代に抗する』奥付から引用しよう。

「一九二八年生まれ。四五年兵庫県立尼崎工業学校卒業後、住友電気工業入社。四六年大同製鋼(五〇年に大同鋼板として新発足、現在の日鉄住金鋼板)に入社して組合運動を担いつつ、日本共産党に入党。五〇年レッドページにより職場を追われ、以降は党の「経営工作者」として労働運動を支えた。六一年日本共産党を離れ、社会主義革新運動(社革)で活動。尼崎の労働運

動・医療生協運動を長く支えている」

このように、杉本は若くして労働運動・政治運動にかかわり、生涯を社会運動に捧げてきたと言っても過言ではない。

◆本書の構成

では、本書の目次を見てみよう。

杉本昭典インタビュー

- 1 一七歳の共産党員
- 2 軍国少年の時代
- 3 呉の志願水兵
- 4 労働組合を知る―戦後の混乱期
- 5 党と労働組合の軋み―扶桑摘発闘争、阪神教育闘争
- 6 五〇年分裂へ
- 7 国際派の迷走と党への「復帰」―「Y」の時代
- 8 軍事路線の党と労働者解放同盟

あとがき

解題 尼崎における日本共産党「五〇年分裂」の展開 黒川伊織

以上のように本書は杉本の口述から成り、その編集は神戸大学の市田良彦教授が行った。インタビューに答えて語った杉本の口述に相当

な手が加えられて、一人語りの読みやすい文章に変えられている。

末尾に付された黒川伊織(神戸大学協力研究員)の解題が時代背景の理解に大いに役立つが、その内容に踏み込む前にまずは杉本のインタビューを概観しよう。

◆一七歳で共産党員に

杉本は戦後まもなく一七歳で労働組合に加入し、ほどなくして日本共産党員となる(規定では入党条件は一八歳以上)。若くして尼崎地方の重要な活動家となった杉子が、ユーモアを交えつつ饒舌に語られていく。戦前の軍国少年時代の思い出も細部にわたり記憶が鮮明で、インタビュー当時八五歳を超えていた杉本の記憶力のよさには驚かされる。

組合運動と共産党員としての活動の板挟みとなっていく様子も生々しい。共産党は戦後の再建当時、徳田球一委員長の指導下、官僚的で硬直した指導体制を敷いていた。労働現場の現実を無視した居高高で抽象的な指令が上から降りてくる。上意下達機関と化した共産党の末端で青年杉本が苦闘した様子が語られる。

やがて迎えるレッドページと五

〇年分裂の数年前から、既に共産党内部では対立の兆しが見えていたという。感心するのは、当時まだ二十歳そこそこの杉本が党の幹部に向かつて物おしせず発言している様子である。

一九五〇年六月、共産党幹部がレッドパージによって公職追放となり、中央指導部が地下に潜ると同時に「所感派」（主流派）と「国際派」（反主流派）に分裂し、杉本は国際派に属することとなる。尼崎では国際派が共産党阪神地区委員会を名乗った。

◆師岡佑行について

本稿で共産党の五〇年分裂の経過を詳述する余裕はないので省くが、本書ではこのくだりで師岡佑行が登場する。杉本自身の言葉で語ってもらおう。

「住友鋼管にビラ撒きに行ったとき、橋の片方で国際派、もう片方で所感派が撒いているなんてことがありました。そこへ警察がガアと来よる。察知した僕らは「逃げい！」となって、バアーと労働者にまぎれて逃げた。そしてら所感派のほうに逃げ遅れて捕まりよったんです。師岡（佑行）君はそれで大久保刑務所行き（昭和二六

〇一九五一年一〇月、政令第三二五号違反で逮捕）。」（五八頁）

また、黒川伊織の「解題」中にも師岡の名前が挙げられている。

「当時尼崎で活動していた師岡佑行は「朝連長洲支部の事務所が細胞事務所を兼ね」ており、細胞のメンバーは朝鮮人のほうが多くなつたと述懐している」（二〇〇頁）

「師岡の現行犯逮捕は分裂が収束したのちの五一年一〇月のことであるが「中略」、この時、逮捕された師岡および朝鮮人男性の即時釈放を求める朝鮮人・日本人六〇名が尼崎東警察署に押しかけ、逮捕者も出た」（二二七頁）

師岡について少し補足しよう。杉本昭典と同じく一九二八年生まれの師岡佑行は、尼崎で代用教員として働いていた一九四九年にレッドパージにより解職された。この時、尼崎の教職員は四人がページされたという（本書「解題」一一二頁）。その後、一九五一年、朝鮮戦争反対ビラを撒布中に逮捕されている。杉本の証言はこのときのビラ撒きの様子を語ったものである。師岡は所感派であったと読めるくだけであるが、実際はどうだったのかは不明だ。

杉本の活動歴やその思想を知る

につれ、「国際派」「所感派」といったレッテル貼りがいかに無意味か痛感させられる。杉本は派閥の一員としての動きよりも、組合に根付いた、そして地域に根付いた活動に何よりも心血を注いでいたことが見て取れる。同じく師岡が所感派だったのかどうかは実はどうでもよいことではなからうか。派閥にこだわるのは党中央そのものであり、幹部について研究している人々であろう。

いずれにしても、戦後の尼崎において、師岡と杉本は共に激動の時代の共産党員として青春を党活動に捧げたのである（師岡の伝記事項については「京都部落問題研究資料センター通信」第四号、二〇〇六年七月、を参照した）。

◆五〇年分裂から軍事路線時代へ

杉本は何度も党の硬直した指令に反抗した様子を語っている。そして、五〇年分裂時代の複雑な内部対立が後々までさまざまところで尾を引いたことも述べているが、国際派が強かった尼崎ではページされた共産党員が工場でのビラ撒きを許されていたというように、排除よりも共闘の気運が高かったことが多くのエピソードで証言さ

れている。

この時期に杉本は二度、共産党を除名されている。一度目は五〇年末で、その後いったん分裂が収束した五一年九月に復党したが、火災瓶闘争などの軍事路線に同調しない杉本は、上層部から疎まれていく。

杉本は共産党中央が地下に潜っていた時代の「裏組織」によって引き起こされた不祥事の一つである「糞爆弾」事件の後始末も負わされた。これは尼崎製鋼労組の平坂春雄の新婚宅に党の裏組織が糞尿を投げ入れた事件を差す。軍事路線に走っていた党が、平坂を「生ぬるい社民勢力」と見なして嫌がらせを行ったのである。

この後始末のくだりといい、杉本が常に共産党の暴走を止める立場で腐心していたことが読みとれる。この後、五三年に再び杉本は除名される。五五年の六全協で復党するが、安保闘争を経て六一年に最終的に党を離れることとなる。この共産党五〇年分裂問題は非常に複雑で、その後の火災瓶闘争、山村工作隊、中核自衛隊といった軍事路線の展開と党内の混乱については理解が難しい。読者にはぜひ黒川伊織の解題を参考にされた

い。この解題はよく整理されていて、時代背景を丹念に追った研究論文としての価値が高い。本書は最初に黒川の解題を読んだから杉本のインタビューを読むほうが理解が進むかもしれない。

◆本書発刊の経緯

本書中には発刊に至った経緯が書かれていないため、本書を編集した市田良彦並びに解題を執筆した黒川伊織へ筆者のインタビューによって把握できたことをここに記す（二〇二〇年四月一四日、電話にて）。

構成・編集を担当した市田良彦は、旧知の間柄であった社会運動資料センターの由井格から送られてきた「関西活動者会議」の手書きの議事録がインタビューの発端であると語る。「これは面白い」と直感したとはいえ、その資料は既に不二出版からマイクロフィルムで刊行されていた『戦後日本共産党関係資料』に収録されているものであることが判明した。さらに、その資料だけではなんともしがたいものがあつたので、杉本人へのインタビューが必要と考え、旧知の前田裕晤に杉本を紹介してもらったのが本書発行の端緒であ

るといふ（後述の『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』に前田が書いている後書きとは若干の齟齬がある）。

市田が杉本のインタビューを文字起こししてかなりの編集を施し、用語解説については黒川・市田が分担（ほぼ黒川が執筆）し、解説については市田が黒川に依頼した。

印刷部数は五〇〇で、費用を払った杉本がほとんどを引き取った。冒頭に述べたように本書は書店で入手できず、当エル・ライブラリーで若干部数の販売を行っていた（黒川は二〇一六年度よりエル・ライブラリーの特別研究員を兼ねる）。問い合わせの電話を受けた筆者はその多くがシニア世代の男性であることを実感した。戦後から一九七〇年代ごろにかけての社会運動の経験者であろうか。

◆続編の刊行

黒川伊織によれば、「杉本さんは六全協までで本の記述は止めてほしいと言った。また当事者が生きていて、迷惑がかかる話もあるので」とのことである。

しかし、六全協で記述が終わっていたことにあきたらない思いをもった前田裕晤は、『時代に抗する』出版記念会の翌日には続編の

刊行のために杉本へのインタビューを開始している。

こうして一年半後に上梓されたのが、『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』である。その編纂過程については「はじめに」で次のように書かれている。

「六全協後については、江藤正修が聞き取り、前田裕晤、広畑貞昭が校閲を繰り返し、作成に至った」

ここで前田裕晤について紹介しよう。前田は一九三四年生まれで、全電通大阪中電支部執行委員を経て一九八九年全労協（全国労働組合連絡協議会）結成に参画した。「解説と後書き」で自らを杉本ら尼崎の活動家の「手駒」であったと敬愛を込めて述べている。

次に本書の目次を掲載する。

はじめに	第一章 軍国少年・杉本昭典
	第二章 戦後混乱期の中からの再出発
	第三章 党活動と労働組合運動に専念する若き青年
	第四章 党内亀裂が深化した五〇年問題
	第五章 軍事路線（Y）と混乱する国際派

第六章 労働者解放同盟

第七章 五〇年問題（補遺）―軍事路線と大衆運動の狭間

第八章 六全協と党内外の間人模様

第九章 六〇年安保闘争と共産党との決別

第一〇章 尼崎にこだわった左翼

結集

第十一章 旗幟を鮮明に、市議選

挙と反戦・労活運動に

第十二章 左翼の総結集と三里塚

闘争

第十三章 右翼労働運動再編に抗

して

解説と後書き

本書のうち、第一章から第六章まではほぼ『時代に抗する』からの転載である。本書冒頭に「編者の了解を得て、引用させていた」とあるが、引用部分と前田が執筆したと思われる地の文との区別がわかりにくく、出版の在り方としていささか問題がある。

とはいえ、杉本の証言の合間の随所に前田の解説が加わるため、全体の流れはつかみやすい。

また、第六章末尾に、『時代に抗する』では詳述されていなかった「関西地方活動者会議」議事録

の内容が紹介されていて、興味深い。これは六全協後の一九五五年九月に党中央から宮本顕治、志田重男、志賀義雄が来西し、自己批判を開陳した会議である。議事録によれば、冒頭、杉本が発言し、分裂が收拾されたはずなのに、除名された幹部・西川彦義が出席していないことを追及している。

◆杉本・前田・江藤の鼎談

本書のオリジナル部分である第七章から内容を見ていこう。

第七章から第一〇章は杉本・前田・江藤の鼎談形式をとる。前田と江藤正修が杉本に質問し、杉本が答えるのだが、全体としては仲間内のおしゃべりのような雰囲気がある。あまりに多くの人名が登場するため、その人脈に通じていない読者には読みづらいだろう。

また、質問と応答がすれ違ったり脱線したり、文脈を読み取りにくい箇所も随所であり、オーラルヒストリーならではの臨場感と読み取りづらさが同居している。

第七章で前田裕晤は杉本に対して、五〇年分裂問題をさらに深堀りして尋ねている。すなわち、軍事路線を担った「中核自衛隊」、コードネーム「Y」と呼ばれた部

隊の指揮系統がどうなっていたのかを尋ねているのだが、杉本は「その点はよく知らされていない」と答えている。だが、スキヤンダルも含めた裏話はいくつも答えている。『時代に抗する』で既に語られていることも含めて、生々しく具体的だ。

第八章では「隠れ党员」としてしばしば筆者も耳にする高野実についての証言から始まる。一九五五年の共産党六全協前後の人間関係の整理を、と前田が振ったところ、江藤が高野実について質問し、そこから高野実がいつまで党员だったのかという話題でひとしきり三人は盛り上がる。

その結論めいたこととして杉本は「政治運動といつても人間関係はなかなか切れないもんや」と感慨深げである。

この章では、共産党人脈のなかにかに実業家が多かったかという話が展開する。実名が次々と出てくるうちで、筆者にとつてとりわけ興味深かったのは南海電鉄社長だった川勝伝が三里塚芝山連合空港反対同盟委員長・戸村一作の選挙運動のためにカンパしたというくだりである。そのほかにも、知らなかった「事実」が次々と語ら

れていくのには驚きを禁じ得ない。ただし、これらの語りの裏付けはまったくないので、引用する場合には文献との照合が必要となるだろう。

第九章は共産党除名を経て「社会主義革新運動」（社革新）へと至る経緯が語られる。

六〇年安保闘争における党の指導に疑問を持っていた杉本は、さらに六一年三月、新しい党綱領の学習のためのパンフレットを尼崎地区委員会名で独自に発行したことが問題視されて（「黄色いパンフレット事件」）、七月には最後の除名となる三度目の処分を受ける。事実と異なる捏造キャンペーンにより「反党分子」のレッテルを貼られていく様子も生々しい。

六一年九月、大阪の大森誠人や小森春雄、沖浦和光らと「社会主義労働者協会」を結成し、関西本部の代表には山田六左衛門が、阪神地区委員長には杉本昭典が就いた。

その組織は一〇月には社革新へとかわり、その時点で阪神地区の指導部の一人に師岡佑行の名が挙げられている。

◆尼崎の左翼結集と師岡佑行

一九六一年一〇月に生まれた社革新は早くも翌年二月にはジリ貧状態となる。

第一〇章では四分五裂となる左翼陣営について語られるが、今以上に多くの個人名と組織名が登場するため、いよいよ読者も混乱の極みとなるか、面白過ぎて前のめりになるかの瀬戸際に立たされるだろう。

この時期に杉本は師岡佑行宅で前田裕晤と初めて出会ったという。前田はこの対談を通じて杉本から初めて知らされた事実もあり、「杉本さんが裏で仕組んでいたとは知らなかった」と言い、杉本は「裏で仕組んだわけじゃないけどな：「中略」俺が最初にあんたに会ったのは、師岡さんの家や。そこで紹介されて、それからずっと一緒にやっとなやないか。因縁やと思ってくれ」と返しているのも微笑ましい。

尼崎では共産党に対抗して診療所設立運動が立ち上げられ、社会党も資金援助して一九六二年一月に「第一診療所」が開所する。その過程で尼崎の左翼と京都の学生をつないだのも師岡であった。

師岡と前田は立命館大学の奈良本辰也ゼミで一緒だったという縁

があり、師岡の繋いだ縁が杉本まで届き、現在に至るわけだ。「師岡さんの影響力は大きかったと思ふよ」と前田が述べている。

この鼎談に登場する多くの人名を見るにつけ、運動も結局のところは人と人のつながりが大きいのだということを感じする。理論よりもイデオロギーよりも人脈が大きな影響を及ぼしていたのではないだろうか。特に尼崎や関西の運動ではその気風が強かったように読み取れる。

◆一九六二年以降の杉本昭典

第一章以降は杉本の直接の証言はほぼ鳴りを潜め、その叙述は杉本の動きを中心としつつも前田裕悟の体験記と混然一体となっている。

杉本たちが新しく組織した社革新は資金難となつて事務所を閉めることになり、六三年から一年半、杉本は失業者として苦勞することとなる。失対労働者を経て一九六四年には経歴を隠して昭和化工に入社した。以後、組合活動に復帰し、八八年の定年まで勤めあげ、最後の一二年間は組合委員長を務めた。

一九六四年以降の杉本の歩みも

また、尼崎における社会・労働・政治運動と密接にかかわっていたことが述べられている。杉本がかかわった団体や運動は数多く、そのうちの主要なものを挙げると、阪神地区社会主義研究会、労働運動活動者会議、阪神医療生活協同組合、阪神現代社などである。本書一章から三章ではその間の経過が前田の回想と共に語られる。本書が刊行された二〇一五年の時点で杉本は八七歳を超えていたが、それでもJR尼崎駅前の公園で開かれた戦争法案反対尼崎集会で杉本が賛同人の一人として発言していることを伝えている。

◆残された資料のゆくえ

本書に登場する多くの人々が所蔵していた資料について、その行方が判明している限りについてここで述べる。

杉本昭典所蔵資料は尼崎市立地域研究史料館が受贈した。目録は採録済みで、メタデータについては同館のWebサイトで確認できる。

その他、この二冊の図書に登場する以下の個人・団体の資料は当エル・ライブラリーに寄贈された。現在鋭意目録採取中である。その完成には相当な時間が必要であり、

すべての資料が閲覧可能になるまでには今後十数年が必要かもしれない。

- ・和田喜太郎旧蔵資料
- ・平坂春雄寄贈資料
- ・阪神現代社寄贈資料
- ・赤本忠司寄贈資料
- ・前田裕悟旧蔵資料

エル・ライブラリーは寄付とボランティアによって支えられる民間の資料館である。二〇〇八年に就任した橋下徹大阪府知事の「委託している府の労働図書館廃止、法人資料室への補助金全廃」という「財政再建策」により、当法人（大阪社会運動協会）は危機的状況に陥った。大阪府の労働図書館を受託運営し、八年間で利用者を四倍に増やすという成果を生んだにも関わらず、図書館は廃止され、法人への補助金は全廃された。そこで、法人資料室が所蔵していた貴重な一次資料を次世代に伝えるため、新たに設置した図書館がエル・ライブラリーである。その運営は役員が身銭を切り、市民と労組・企業が寄付することによって支えている。スタッフの多くがボランティアである。

二〇〇八年以来、非常に厳しい運営が続いているエル・ライブラ

リーではあるが、スタッフの意気は軒高であり、今後とも資料館の運営を続けていく所存である。入居するエル・おおさか（大阪府立労働センター）の家賃をこの十年間で二倍以上に値上げされるといふ大阪府の非道のしうちを受けているということもあり、多くの皆様のご支援をお願いしたい。（文中敬称略）

（『時代に抗する』航思社刊、二〇一四年）
（『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』鹿砦社刊、二〇一五年、一三八〇頁）

※※※※※

エル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）サポート会員募集中

◎大阪市中央区北浜東3-14
エル・おおさか（大阪府立労働センター）4階

◎年会費一口5千円で、資料の貸出可能

◎会員は勉強会のための夜間貸し切り利用が可能

◎会費は税額控除の対象
◎その他、詳細はWebサイト参照